

震災によって気づいた、利他の心。

石巻教会 蜂谷諭史さん

平成23年3月11日、蜂谷さんは石巻市で東日本大震災に被災した。震災は、生まれたばかりの幼い命も、将来に胸をふくらませていた命も一瞬にして奪った。そうしたことに胸を痛め、「なぜ、自分が生き残ったのか」と自問自答した。蜂谷さんはこれまで、少年時代の貧しい生活を反省心に变え一所懸命に働き、地元の石巻市で洋風パブを5店舗構えるオーナーとなった。ただ利益をあげることに、それが蜂谷さんの価値観だった。しかし今、そうした財産をすべて失い、残ったのは命だけだった。そんなとき、「四無量心」という仏教の教えに触れた。それは、相手の幸せを願ったり(慈)、苦を除いてあげたり(悲)、ともに喜んだり(喜)、相手を好き嫌いで差別しなかったり(捨)する心の大切さを説いた教えだ。自分の金儲けに執着し、従業員やお客さんの幸せを願うことはなかったと振り返る蜂谷さん。「物や金に恵まれるだけが幸せではない。人さまのために生きることが自分に必要なのだ」と悟り、「四無量心」の学びを少しでも実践していきたいと心に決めた。



自他の幸せを願う心

一般的な考えでは、仏の教えにふれたばかりの初心者が、人にご法を伝えることなどできない、というのがふつうです。ところが、法華経には「自分はまだ迷いから抜けだすことができなくても、仏の教えを聞いた人は苦しむ人々を救うことができる」と、はっきり示されています。

たとえば、友人に強い怒りを抱いていた人が、仏の教えを聞いて「その怒りは、友人を自分の思いどおりにしたいという利己心りこしんが原因だった」と反省なせいしたとしましょう。そして、そのことで和やかな関係をとり返した体験談を、人を恨みつけて苦しんでいる人に話したとき、「私もそのような見方、受けとめ方を身につけたい。気持ちを楽にして、幸せになりたい」と思わせる力があるのです。

なぜなら、たとえ自分はまだまだ未熟でも、仏の教えが真理にかなっているからです。そして、だれもが人と調和したいと願っているからです。だからこそ、仏の教えを聞いて得た気づきや感動を素直に話すだけで、「私もこの人のように明るく、素直な心で日々をすごしたい」という願いや、「苦悩する人に寄り添って、幸せになる喜びをともに味わいたい」という利他の心りたをも発はせしめるのでしよう。

立正佼成会